

## ボールボーイの君がいてくれたから

### 〈『部活動の地域移行について考える』②〉

私は、スポーツは何でも観るのもやるのも好きですし、自分自身もこれまでいろんなスポーツに勤しんできましたが、いわゆる、コテコテの「体育会」的な気質は好きではありません。

自分が中学校で所属していた部活は、いつも先輩が偉そうにいばっていて、後輩をこき使ったり、いじったりいじめたりが日常茶飯事でした。自分たちが最上級生になったらそんな雰囲気のない部にしようと同期で話していて、実際に上に立って後輩にやさしく接すると、今度は逆に先輩をなめた態度をとったりする後輩も出てきたりして、それはそれでまた問題があり、なかなか「ブカツ」というのも面倒な代物だと中学生ながらに思っていました。

教師になって若い頃に野球部の顧問をしていた時のことです。各学年20人の全部で60人くらいの大所帯で、市内でもトップクラスの実力がありました。そこで苦労したのは、ベンチ入りメンバー選びや選手起用についてです。練習試合や各種大会等のたびに、いろいろ頭を悩ませながら試合に臨みましたが、保護者からはいろんなことを言われました。

「先生、どうしてうちの子を試合に出してくれないんですか。家に帰ってからも遅くまで素振りして頑張っているんです。」このようなことを訴えてくるのはお母さんの方が多かったような気がします。やっぱり母性が強く働くのだと思います。(頑張ってるのは、あなたのお子さんだけではないんですが・・・) 保護者の中には自分の子しか見えてない人も多いと思いながらも、そういった気持ちは親として当たり前のことと、丁寧に受け止めて対応しました。

「先生、あの上手な1年生使った方がいいよ。誰が見たって2, 3年生よりずっとうまいよ。」こういうことを進言してくるのは、自分も現役の時にバリバリの運動部で育ってきたお父さんが多かったように思います。

「授業態度は悪いし清掃もさぼっているあの子が、野球部ではレギュラーなんですね。」と同僚の先生から辛辣な皮肉を浴びせられたこともありました。

私が部活動を担当してずっと掲げてきた方針は、「勝てる部」ではなく、「周囲から勝ってほしいと願われる部」でした。

この野球部でも、「1人の百歩より60人の一歩」。「一部の人間が100点、残りのほとんどの人間が30点の満足度よりも、部員全員が75点以上の満足度と思える部をめざす」と常々言い続けてきました。

そこで、上位大会にもつながる本番の市内大会のメンバー決めは、部員全員の投票にしました。次のような要領です。

3年生全員と1・2年生で試合に出してもある程度通用する部員約35名をピックアップした名列表を配って、次の3つの観点から、自分がベンチ入れメンバーにと思う人を、上から順番に1~35の数字で記入させたのです。

- ① 人間性（日頃の学校生活の態度も含めて）
- ② 部への貢献度（準備・後かたづけの取組、活動内での礼儀や声出し、先輩後輩間も含めた部員との人間関係 等）
- ③ 野球そのものの実力

「みんなが勝つことを最優先に考えるなら、でたらめな人間でもいいから野球がうまい人間を選べばいいし、こいつにいい思いさせたいなあと思えばそいつを選べばいいし、もちろん自分のことを若い順番で選んだって構わないよ。ただし、そのメンバーから誰を試合で起用するかは監督権限だ。だから、それで負けたら責任は自分にある。」

みんなが記入した数字を表計算し、合計数が小さい方からベンチ入りメンバーを選びました。このような方法をとったことで、最終的に野球の実力あっても、学校生活がでたらめで周囲から全く評価されていない子は選ばれませんでした。

体育大学出身で野球が専門の副顧問は、「こんなやり方で本当に勝つ気があるんですかね。」と周囲に陰口を叩いていたことも私は知っていました。

県大会にも進めるのではと前評判の高かったチームも、県大会出場をかけた試合で敗れました。野球の実力だけで構成したチームならば、とも思いましたが、あくまでもそれは仮定の話で、後悔など微塵もありませんでした。

部活動は一体誰のものでしょうか。もちろん顧問のものでも学校のものでもありません。生徒のものだと思います。勝負の世界で生きてきた人間から見れば、私など腹を抱えて笑うほどの甘ちゃんに違いありません。

でも、所詮、義務教育段階の中学校の「ブカツ」なのです。勝つことより大切なことがある。それを教えるのが最優先だと今でも強く思っています。

私が当時の野球部で、今でも最も印象に残っている生徒は、キャプテンのS君でも、エースのK君でも、4番バッターのH君でもありません。

ノックの時に、いつも私が腰の後ろに差し出した左手に、絶妙のタイミングで、それも掌の真ん中にピタッと収まる位置にいつもボールを差し出してくれる役割をしてくれていたT君です。あれから30年経った今でも、彼が差し出してくれたボールの感触が、私の左手には残っているのです。

T君の公式戦での出場記録はゼロ。でも、T君はチームに欠かせない唯一無二の存在でした。

「全員野球」「野球は学校生活に通じ、学校生活は野球に通じる。」すべての部員に伝えたかった一番のことです。

学校の部活動が地域移行となって、T君のような子が簡単に切り捨てられないかが大いに心配です。